第４６回全国同和教育研究大会徳島大会特別報告に寄せて

板野中学校　　森口　健司

全同教徳島大会開会行事での特別報告を終えて、心地よい感動に浸ることができた。私が特別報告をするように決定したのは、１年前の夏だったと思う。徳島の先人が築いた礎を私はどう受けとめていくか、私に課せられた課題は大きかった。それゆえに、この１年余りの間にたくさんのことを学ばせてもらった。人間は厳しい状況に立つことによってより大きくなれると自分を励まし続けた。

私に与えられた４０分余り、私の頭の中には父の顔が浮かんだ。母の顔が浮かんだ。祖父の顔が浮かんだ。そして、１０年前に亡くなった祖母の顔が浮かんだ。１万を遙かに越える人たちが聞いているという緊張感は壇上に立ったとき吹っ飛んでいく。私の声が私の中で反芻され、自分のあり方が自分の中で整理されていく。多くの人々の熱い視線が本当にありがたかった。

部落解放、差別からの解放を願い歩いている人たちが全国各地においでる。初めて出会った人たちが大半であるのに、一人一人の顔が私とずっとつながった仲間であるように思えてくる。語り手と聞き手の呼吸、参観の方々の息づかいが伝わってくる。

今、祖父はこの時間をどのように過ごしているのだろうかと思った。母は今、どのような思いでこの時の流れを感じているのだろうかと思った。父は今、どのような思いで働いているのだろうかと思った。祖父や祖母、父や母の生命をもらって生きていることが本当にありがたい。

特別報告の４０分余り、張りつめた緊張感の中で流れていく時間。会場にいた妻の涙が見える。板中の仲間の涙が見える。部落の仲間の涙が見える。差別というものが本当に憎い。

私の娘、丸ごと愛し続ける愛子と佐紀が、私の生命を受けたがために差別を受けるという。私の子どもであるために部落差別にさらされるという。この不合理に怒りがこみ上げる。私の闘う姿を通して、娘たちに人間の生き方をじっくりと考えさせていきたい。

多くの人が拍手してくれたこと。多くの人が励ましてくれたこと。まさに感謝の中に生きた１９９４年１１月２６日であり、全同教徳島大会特別報告であった。

この１年、自分と部落問題とをしっかりと整理し、日々たくましくなっていく妻の姿が、私に大きな勇気を与えてくれた。妻の一言一言が私の目を覚ましていった。妻は私に自分のすべてをぶつけてくれる同志である。

全同教大会や小学校の教師という自分の立場に寄せて綴った文章を全同教大会の１０日ほど前に見せられた。そこには妻の苦悩やその生きざま、願いが綴られていた。それは妻が勤務する小学校でのＰＴＡの参観授業後の部落問題学習に寄せる小集団学習についてまとめた文章である。

※　　※　　※

先日のＰＴＡ小集団学習での部落問題学習は、一人一人が部落問題を自分の問題としてとらえ、具体的な体験を交えての話し合いができよかったと思う。ことに結婚差別について近所や親戚であった事例が出され、それについての思いが語り合えた。講師の方のご自分の娘さんの結婚に際して、ご主人と話し合い、聞き合わせをしないということが同和教育に取り組んできたご自分の結果というお話に続いて、ご自分の結婚に際して、相手の男性だけを見て、聞き合わせもなく祝福してくれたご両親のように、お子さんの時もそうしようと今からご主人と決意されていると言われた保護者の方の話など心打たれた。

しかし、席の順に話をする形式で、最初のうちは差別の厳しさを痛感させられる発言や、やや傍観者的な発言があり苦しかった。その学習の場には、Ａ地区の人ではないが、対象地区出身の

人が、私の同級生だけでも二人おられた。その立場を思うと顔が真っ赤になってきた。先生方の「教師」の立場からとしての発言の域を脱していない発言は一番こたえた。これが地区の子どもが顔をあげられない授業かと思った。次に何かしなければと、非常にあせったが、そうこうしているうちに、その同級生の一人が出ていってしまった。ショックだった。私は自分の順番がきて、自分の結婚差別について語ったが、教職員の会では、最近は平気で話ができるが、自分の住んでいる地域の人々を前にして、やはり声が震える。父やこの小学校の校区出身で私以上に知り合いの多い母の立場をつい考える。「何が大変でしたか」と聞かれ、「周りの人に分かってもらうこと、親戚の人に分かってもらうこと。」と答えたが嘘である。両親と涙を流して言い争ったこと。結婚して子どもができるまで、長い間、母親とは目を合わせて話ができなかったこと。いまだに部落問題について母親と話をすると、深い溝を感じ、ついにはののしり合いになり、最近はお互いにその話は避けていること。

昨年、夫が「峠」という作品を文部省の道徳資料として書いた。自分の結婚差別の体験をもとにしてである。夫は、何度もその都度、私に「書いてもいいか。この文章はこのままでよいか。」と聞いた。両親を気遣ってである。私はいつもかまわないと答えたが、出版される頃には、父も（教職を）退職しているだろうという計算もあった。「峠」と事実との違いは、最後の結末である。あんなに美しい結末ではない。

先月、ついに出版された。そして、アスティとくしまでの全国同和教育研究大会の特別報告でも、「峠」に触れる。両親に読んでもらうかで二人で悩んだ。子どもの誕生パーティーにかこつけて来てもらい読んでもらった。重い重い空気が流れる。両親はアスティ徳島に聞きに行きたいと言ってくれたが、いまだに私の方で「峠」についての話は避けている。しかし、父とは段々と突っ込んだ話ができるようになってきた。

父が結婚前、「お前と町中で二人暮らしをもししよんだったら、もっと正面切って応援するんやけどな」とポツッと言ったことがある。「父さん、それが差別とちがうん」と言うことが、そのときの父の苦しみを前にして言えなかった。

父は、「間違っているのは、差別する方なんだから、信念を持つこと。」と自分に言い聞かせるように話してくれる。数年前、徳島で四国同和教育研究大会があったとき、私が参加していないというと、「何のために結婚したんな」とひどく叱られたこともあった。近所や親戚の人々とのつきあいの中で、私以上に厳しい差別の矢面に立たされている父であり母である。

１００％自分をさらけ出して語るということはなかなかできないことである。私が一方的に心配していた一人、残っていた方の友人は、立場を明らかにすることはなかったが、自分の思いを話してくれた。私の話の途中、こちらを振り向き微笑んでくれた。

この中で、Ａ地区に住んでいる人、語ろうが語るまいが、差別の中に自分をさらけ出して生きている人々の強さを再び思い知らされた。

教師も一人の人間として、できることならその生い立ちの中での部落問題を語ることが必要だと思う。教職員間で、根本的な同和教育観についての話し合いが、本音で語り合えない以上、授業研究や研修形態等について話し合いをしても、お互いがずれていると感じるだけの繰り返しではないだろうか。

私自身の反省として、対象地区の子どもや人々と積極的にかかわっていこうとする姿勢が欠けている。行事に参加しても形ばかりである。腰が引けている。これは何なのだろうか。それだけ強い姿勢、部落問題に対する強い姿勢がないのだろうか。根強い差別者としての意識が根底にあるのだろうか。たぶんそうであろうと思う。自分の課題として自分につきつけたい。

※　　※　　※

全同教大会が終わった日、妻がつぶやく。

「私も中学時代にお父さんのような先生に出会っていたら、私の人生観は大きく変わったと思う。」

妻の思い、その思いに少しでも近づけるように頑張っていきたい。

決しておごるまい。決してうぬぼれることはない。自らの初心を心に刻み歩いていく。部落を語っただけで眼に涙があふれた日々・・・・・・。決して忘れるな。決して天狗になるまい。そして、自分の原点を決して忘れまい。

父母の労働。祖父母の労働。その願いをわが原点として、ひたむきに一日一日を歩いていこう。生きるとはまさに学び成長することだと思う。決して愚痴を言うな。決して悪口を言うな。それぞれの思いに寄り添い。その底にある思いをしっかりと担げる人間になりたい。きれい事ではなく本音で生きていきたい。本物の自分をつくるために。決して思い上がるな。その思い上がりが堕落につながる。決して初心を忘れるな。あの震えた涙を忘れるな。

※　　※　　※

これは、大会の翌日に綴った文章である。恥ずかしくなるような文章であるが、私の本当の思いを正直に綴ったつもりである。反省の繰り返しであるが、特別報告での感動を胸に頑張っていきたいと思う。大会が終わって多くの反響があった。その中で立場を同じくする人からの手紙は、私に勇気を与えてくれた。愛媛県から参加していた年輩の方の手紙である。

※　　※　　※

前略、年の瀬もせまり何かとお忙しいことと思います。お元気でしょうか。先日の全同教大会での先生の体験を交えながらのお話を聞くことができましたことが、私の今までの考え方、生き方に大きな心の変革を与えてくれました。先生のお話を聞かせてもらったことに、また森口先生に出会ったことに感謝しております。

私の地区からも何人か学校の先生が出ておりますが、自分の故郷が言えない話せないで暮らしております。私も徳島県での全同教大会に参加させていただき、各府県の部落の人たちのすばらしい発表を聞かせていただき、私の今日までの考えが生き方が変わり、自分の故郷が言えるようになりました。私は５７歳になりますが、先日の○○町の同和教育研究大会で初めて多くの皆さんに自分の地区の暮らしや、先人の残してくれた祭りなど地区の歴史について発表することができました。このように多くの皆さんの前で自分の故郷が話せるようになり、心が解放され楽になりました。

徳島県での大会に参加させていただき、森口先生のお話を聞かせていただき、このような先生がいたのかと感動し涙が止まりませんでした。大会の帰りに会場の入口で森口先生に会えたことも大変うれしく思っています。声をおかけしたのですが覚えてくれているでしょうか。本当にありがとうございました。もう一度お会いしてお話が聞けたらと思っております。

私の町は人口７９００人余りの寒村であります。その中で部落の人口は、１０２名で戸数は３５戸であります。その１０２名の中で学習会に参加しているのはまだまだ少なく毎月５名前後しか参加していません。

このように私の地区では先生方と一緒に学習するのに、地区であることのこだわりがあり参加できず苦しんでおります。まだ私たちの町内では差別用語がささやかれることが多く、地区外の人たちは地区の人たちの学習会に不満があるようなのです。その一つに同和対策事業に対する行政への不満があります。

「どうしてあそこだけようなるんぞ。対策事業するのはだれが決めるんぞ・・・・」

そう言った地区外の人たちの思いに行政は説明ができていません。その説明の不十分さが地区外の人たちの対策事業に対する大きな不信となり、そんな雰囲気が地区の人たちの不満につなが

り、教育委員会の学習会の取り組みにも協力しない状況になって困っています。

このような町行政への不信不満が地区と地区外とを遠ざけ、建て前だけの会話となって盛り上がりのないさめた形での学習会にしていきました。このお互いの不信を取り除くことがこれからの大きな課題となっております。

私にとって森口先生と出会えたことが、このように自分を解放することができました。大きなよろこびであります。ありがとうございました。できることならもう一度先生にお会いしたいと思います。

ありがとうございました。お元気でサヨナラ。

１２月１３日　午後７時２０分

※　※　※

また、全同教大会に参加していなかったが、私の報告集の原稿を読まれて手紙をくれた人もいた。その手紙には、自らを燃やしながら部落解放の道を歩んでおられる原稿と詩が掲載してある。私自身の一つの指針を示してくれた手紙と、同封していただいた原稿と詩を引用させていただく。

※　※　※

冠省

全国同和教育研究大会徳島大会に参加した友から、先生の「峠を越えて」の実践発表のコピーをいただき読ませてもらいました。

自分の部落差別の体験と重ねながら、息もつかずに読み終わり、今その感動で胸を熱くし眼に涙を浮かべながら筆を走らせております。ありがとう。本当にご苦労さまです。

今後とも朝焼けの空を真っ赤に染める太陽の如く人間教師としてご精進ください。ご健康とご活躍をご祈念いたしております。

私も昭和４年生まれで６６歳ですが、老骨にむち打って頑張っております。私の被差別体験に一部です。参考になればと思い同封しました。

石井　隆三

《追憶の彼方に～部落差別と向き合うために～》

部落差別の現実を正しく受けとめ、差別の実態に肌でふれることによって部落問題に対する正しい理解と認識を深めることができる。

そこで自分を通して部落差別の実態を訴え、真実を語り、問い、そこから部落問題を具体的に深く見つめ、社会全体とのかかわりを考えなおしてみたいと思います。

就職に、結婚に部落の人々がうけた心の傷はどんなに説いてもいやしきれるものではないにしても、一片の記録として心の底に呼び起こすことにした。

私の家は非常に貧しかった。兄妹８人の長男として生まれた私は、河川敷にある３０アールほどのたんぼに母とよく農作業を手伝ったものだ。当時、一家の生活は父が石工職人として村はずれの石切場に働きに行き、母は年中、たんぼの世話と、夜おそくまで夜なべをしていた。

今でも覚えているが、冬の寒気がくずれ落ちたカベのスキ間を通して入ってくる土間の上にムシロを敷き、カマドの炭火で暖をとりながら家計の足しにと、ぞうり作りをしていた。

父も一日の仕事が終わって帰ると、疲れをとるため毎晩、晩酌を飲んだ。父の飲むその酒も一升買いする余裕がなく、２合入りのかんぴんをぶらさげ堤防づたいに、隣村の造り酒屋へ、その日の分だけ買いに行くのが私の日課になっていた。

その当時、私の家がつくっていた、たんぼは全部小作で、それも、はじめに言いましたように大変立地条件が悪く、低い堤防沿いの遊水地帯にあったために、収穫の方も、平均反収の半分以

下であった。たとえば、激しい雨が２、３時間も降ると、またたく間に稲は頭まで冠水してしまい、水はけが悪いために、青みぞろという藻が発生する。そして水が引き始めると、とりもちのように稲にべっとりとまきついてしまう。それも早く取り除かないと、夏のきつい太陽が照りつけると、今度は藻が乾燥し、放置しておくと稲を痛めてしまうので藻を取り除く。一株ごとにやる作業だから大変な手間がかかる。

子どもの私にとって、決して楽な仕事ではなかったし、水しぶきをあげて大川で泳ぎまわっている友達を見て、うらめしく思い、しぶしぶ母のあとについていった。１カ月ほどの夏休みも、ほとんど毎日そんな生活だった。そして、そんな労苦も結果的には報われない。たとえ立地条件が悪くて、平均反収の半分以下であっても、どこへも泣きついていくこともできない。年貢米の残りで生活しているという、わが家の暮らしも父の収入だけが命の綱であった。

そんなある日、父が石切場で事故にあった。私がちょうど小学校６年生の時である。一家の柱が倒れたわが家の状況は灯が消えたように、生活苦と、その上に父が働けないという不安が一度にのしかかってきた。そのときから、私は学校を休んで、うちの仕事を手伝うようになった。子どもの私にとって、父が事故で倒れたために、小さな担い手として、そのハンディを背負わなければならなくなった。家計はいっそう苦しくなり、毎月学校へ納める修学旅行の積立と学級費、あわせて１２銭のお金が持ってゆけなくなった。当時、４人が小学校へいっていたので、母が「お前たち、上の２人は辛抱して妹の方から先にしてやってくれ」こう言って姉と、私は後回しになった。こんなとき学校へ行くのが一番嫌だった。名前を呼ばれて、先生に持ってこれない事情を話すのが非常に辛かった。友達の視線が私に集中して、噂や陰口を言っているような気がしてたまらない気持ちだった。だが、１日遅れるくらいなら、なんとかゴマかせても、また朝になって母の姿が見えないと、隣近所をかけずり廻っているのだなと直感した。子どもたちの前では、なるべく辛い思いをさせたくないという母の気持ちが痛いほどわかるけど、今日も、また、お金ができないと思うと学校へ行くのが嫌であった。

家は貧困であっても、子どもにとっては学校へ行って勉強したい。親も、また、学校へさえ行ってくれたらなんとか一人前になってくれる。小学校だけでも無事に卒業してくれたら……。いや、親にすれば、しっかり勉強させたいと願っていたに違いない。

父が事故で倒れてから１カ月ほど、ほとんど学校を休んだ。毎日母と一緒に、たんぼに出て仕事をした。朝起きると、身体のあちこちが痛む。それでも弱音を吐かずに頑張った。時折小学校のグランドで友達のはしゃぎまわる様子が風に乗って伝わってくる。そんなとき、弱音を吐くなと自分に言い聞かせても、急にくじけそうになっていく。

そんな中にも、そろそろ学校も終わりに近づいた。当然もちあがってくるのが修学旅行の話題である。当時、私たちの学校では、１泊２日で三重県の伊勢神宮参拝コースが大体ならわしになっていた。小学校という、初めての集団生活にとって、それは夢にまでみた楽しみである。しかし、私にとっては、修学旅行にゆかせてもらうことについて、父に承諾をうけなければならなかった。私の場合は、修学旅行の準備などで両親に相談するということでなくて、まず「行かせてもらえるか」「もらえないか」の両親の許しをとっておくことでありました。

父が言った言葉はこうであった。「修学旅行は行かせてやりたいが、６円５０銭で米が１俵買える」米１俵……、米１俵……、子どもの私にとって通じるわけがない。夢にまで見てきた修学旅行。私にとっては、父のいう生活のことよりも精神的に耐えられず、このときほど貧乏をうらみ、両親をうらむ気になったことはなかった。今まで、どんなに苦しくても両親の苦労をそばから見ていて、それなりに耐えてきたつもりであったが、そのときの父の言葉で貧困に負けまいとする励みもいっぺんに消し飛んでしまった。

母は私に対して、慰めの言葉は言ってくれるが、そんな私には何一つ通じるわけがない。食事もノドを通らない。風呂へも入らず、床にもぐり込んでしまった。その晩は一睡もせず、貧乏の辛さを嫌というほど感じとった。

ただ父は「修学旅行くらい行けなくとも男のお前には我慢ができる」こう繰り返すだけだった。貧困が子どもの教育の機会を奪ってゆくどころか、学校という集団生活から部落の子どもが落ちこぼされてきた。さらに部落の親たちは、このことを部落差別の結果として受けとめず、そのことに気づきもせず、厳しい生活をしいられ生きてきた。たとえそれが差別とわかっても差別という苦痛から逃避するしかない実態があった。そんな中で、子どもにだけは貧困と部落という二重の苦しみを背負わせたくなかったのかもしれない。

ちょうどその頃、第２次世界大戦は日毎に戦況が悪化し、国民すべて老いも若きも総生産という名のもとにかりだされていった。小学校では、毎日授業は行うがほとんど勉強らしい勉強もせず、軍事的な教練や農具をかついで、さつまいもを作るため畑の開墾にかり出された。

今でも、私の脳裏に幼かった頃、学用品のお金をつくるのに夜なべをしてくれた母の姿。作ったぞうりを店に持っていってお金に換える。嫌なことではあったが、学校へ行くためにはと自分に言い聞かせた。そして、私は部落差別のことについては、何一つ知らぬまま小学校を卒業した。

私は小学校を出て担任の先生の世話で、国鉄のあるローカル線の駅に就職することになった。

初めての未知の世界に対する不安と喜び、そしてまた少しでも暮らしが楽になればとも思っていた。ところが、私を待ち受けていたものは、部落差別であった。私が部落出身であるという、ただそれだけであまりにも冷酷なやり方で部落差別を知らない私から、職場を数日足らずで奪ってしまった。

私は勤めた駅の勤務形態は隔日勤務で、朝出勤すると、その日は宿舎に泊まることになるわけで、寝具の準備をしなくてはならない。母にとっては、大変重い負担になるわけです。それでも母は、「息子の大事な就職のことだ」と言って、やりくりしてひと重ねの寝具を用意してくれた。「みんなと合宿生活をするんだから」と言って、丹念こめて洗濯から綿の打ち直しまでしてくれた。肌にさわると痛く感じるほど糊をきかせてくれた。せめてもという母の気持ちが感じられ、「気をつかわすなあ」と感謝をした。

駅路を急ぐ私の背中に、母の真心こもったフトンの重みが心なしか「頑張れよ」と元気づけてくれる。咲き残りの桜がときどき足元に舞い散る……。

「今日からおれも国鉄の卵か」と大きく胸を張ってみた。

目的地へ着くと、さっそく駅長から紹介してもらい、先輩のあとへ……。右を見ても、左を見ても何からやっていいのかまったくわからない。マゴマゴしながら先輩のいうとおりに見よう見まねでついていった。

列車が発着すると、駅名歓呼というものをやるのですが、どうしても声となってでてこない。これが言えるようになったら、みんなについていけるような気がした。就労の状況はここまでにして、緊張した一日のつとめも終わり、その日は、ぐったり疲れてフトンにもぐりこんだ。翌日、交替をして帰宅した。

なれない乍らにも、私の職務、つまり担当する役目をなんとか無事にはたし、自分ながらに、かすかに職場に自信と希望がもてるようになった。そんな或る日、いつもとおなじ駅舎の掃除を終えて宿舎に戻ると、土間の上にフトンがころがっている。よく見てみると、あきらかに自分のものにまちがいない。なんだか悪い予感がした。

「なにか、まちがいでもやったのだろうか」それとも「鍛える」という意味なのか。いずれにせよ冷静になることだと自分に言いきかせた。みんながなにかひそひそと話していたが気をとりも

どし、その夜もいつものように床についた。ねむれない。神経を集中して皆が話していることを聞こうとしたが聞きとれない。

ただ、いまでもそのときの出来事で部落を知らない私にとって、「うちが貧しい」というだけで、肩身のせまい思いをもちつづけていたが、そんななまやさしいものではなかったのです。どうやら周囲は、わたしが部落出身であることを知っていた。

それからというものは毎日、おなじことが繰り返された。そして、とうとうこんなことを聞いてしまった。「あいつのフトンはくさいから、おれたちの押入れにいっしょに入れるな」。母が丹念こめて仕立ててくれたそんなものが「くさいはずがない」、何かの嫌がらせにきまっている。そう言い聞かせて、さらに耳をそばだて聞き入った。「あいつは部落やで」そのときの、私には部落やからみんなに差別をされる、それでけぎらいされる。それが全くわからなかった。ただ「クサイ」といっているそのことだけは確かめておこうと、翌日みんなが出ていった隙に押入をあけて積みかさねてあるフトンに鼻をすりつけるように一枚一枚匂ってみたが「クサイ」といっている先輩の方が髪の油などがこべりつき、臭気を放っていた。私のフトンは、むしろ洗濯糊が深く浸透していて心地よく感じた。でなくとも常識では考えられない「なにかわけがある」そう思ったわたしは、早速同級生のＴ君にそのことをはなした。

私が部落民であるということを知ったのはこのときである。「おまえ、今までそんなこと知らんかったんか。」「うちの村は、これやで。」指でゼスチャーしてみせてくれた。Ｔ君の話も半分じょうだんめかしではあったが、そのとき、わたしにとってはＴ君の表情からなにか重大さを感じとった。Ｔ君にたいして、「もっと、くわしく教えてくれないか」とさらに問いかけたが、Ｔ君の答えは「わしらは、これや。」というだけで、それ以上説明する知識はもっていない。彼自身も誰からか聞かされて、先祖や親たちが悪いからだとぐらいしかとらえていない。だから、わたし自身も納得はいかないが、なんとなく罪悪感みたいなものを感じ、「それで、部落のやつのフトンはクサイ」といわれる。差別をされるのだと思った。

部落のことを知った私は、両親にも担任だった先生にも、そのことについてはなにひとつ相談もしなかった。そのときから「もう駅はやめる」こう覚悟を決めた。どうせ相談をしたところで「部落だとわかった」この場になって相談をしても余計に苦痛が大きくなるように思った。

「なぜ、もっと早く部落差別についておしえてくれなかったのか。」「部落差別というものがわかっていたら就職なんかしなかったんだ。」くやしさがこみ上げてきた。そして、両親や先生までが憎いと思った。

よくねむれなかったためか、頭もぼんやりと、いつもとちがって、足どりも重く、その日も勤務についた。駅名歓呼も声にならない。一日中足が地につかない状態だった。ながい一日だった。勤務のあい間をみて荷づくりしておいた。最終の列車をうけると同時に寝具を背負って線路づたいに夜道を家路へ向かった。

部落民の持ちものは汚い、臭い、部落民にたいする偏見がいとも簡単に親のねがい、子のねがいを奪ってしまった。貧しい生活と、小学校時代のブランクをそのまま背負っていきなり社会へ出ていくわたしたちに想像以上の残酷な部落差別が待ちうけていた。家についたら母になんといって報告をしようかとそればかりを考えながら・・・・・・・・。

本当の事をいったら、きっと落胆するであろう。気苦労をかけている母にだけは、もうこれ以上の心配はかけたくなかった。

母は「お前、こんなにおそくどないしたんや」と心配そうにたずねた。心配さしたらあかんと思い、なるべく表情を面に出そうまいとして、「駅というとこは勤務がつろうて、わしには勤まらんので止めたんや。」母もそれ以上はなにも聞こうとはしなかった。「早ようやすまんか」母

のことばで父に気付かれぬようにふとんにもぐりこんだ。このときほど母が好きになり、「わが家いうもんはええなア」と思ったことはない。１０日余りの合宿生活だったが、ひと晩もゆっくり足をのばしてねた日はなかった。

部落差別というものをまったく知らなかった。ただ生まれたそこが部落だというだけで差別をされる。そして部落差別に対する無知がせっかくの就職の機会をも奪ってしまった。

部落差別による精神的なダメージは余りに大きく、心の傷はしばらく癒えることなく、いつしかひとりで差別のない社会への強い願い、それは差別からの逃避の気持ちにかわっていたと思う。

当時１５才（今の中学３年）だったわたしの頭にふと浮かんだものは、海軍志願兵募集のポスターであった。同時に軍隊というものに心が動いた。なぜなのか、それは国境を越え、命がけで戦っている戦場には差別はないだろう。そして、もうひとつは「人より偉くなることだ」軍隊というところでの地位が高くなれば、必然的に差別を受けなくて済む。今で思うなら差別に追込まれた人間のギリギリの生きる手段であったのかも知れない。さらに、そのショックから逃れようとし、戦場という最大の危険なところへ新天地を求めたのです。それから数ヶ月後、合格の通知をうけた。最後の親孝行と、出征の前日まで薪とりに山へいき、家の廻りにいっぱい積上げてやった。出征の前日、１日だけ休んで身の廻りの整理をすませ、思いきり最後の１日を楽しんだ。夜は親せきの人や、友人が大勢集まってきて、送別会を盛大にやってくれた。

短期つめこみ教育を終ると配属が決まった。同期生数人と呉港桟橋に到着したころは、港全体に夕闇が深くたれこめていた。一隻のランチがすでに桟橋に到着していて、係官の指示で全員乗込んだ。エンジンが音をたてて海上をすべっていく。まもなく、急にスピードを落し停止した。山のような巨大な物体が目にはいった。初めて見る軍艦である。タラップを駆けあがると、そこに衛兵が立っていた。敬礼をして甲板へでた。乗艦の手続きをすべてそこで済ませた。

そのときから口に出していえないようなきびしい艦内勤務が始まった。月月火水木金金、それに、日夜を分たず敵の艦戦機が来襲、まるで秋の空に舞う赤トンボを思わす光景である。朝起きると夜まで命があるやろか、夜になったら朝まで命があるやろか、そんな悲壮とも思える状況が毎日続いた。

対空戦闘が終ったあとは、負傷者で病室は満員。オシタップ（洗濯容器）は負傷兵の血で真赤に染まっていた。夜ともなれば、そこ、かしこで故郷の肉身を想いだし泣いているのだろうか、毎夜のようにすすり泣きの声が聞かれた。

しかし、そんな生と死を左右する戦闘が終ると戦塵を落とし、われにかえれる憩いの場があった。８時の巡検（点呼）のあと、同郷のものだけが一ヶ所に集まって、ふるさと談義に花を咲かせた。わたしの所属分隊は航海科で、当時、わたしの出身地のまわりのひとたちが自分を含めて５人いた。

出身地だけは、どんなことがあっても「くちを割るな」とかたく自分に言い聞かせてきたわたしにとって話題が出身地にふれてくると意識的にさけようとした。乗艦から数日たったある日、一人の下士官から呼出された。「きみは○○村か、俺は中町の○○だ。」「きみの村から○○工場へ○○さんという人がいっているやろ。」その下士官は、わたしの姓から内々察していて、もしそうだったらいろんな面で力になってやろうと思っていたに違いない。その下士官も復員後わかったのですが、実は部落出身だったのです。

部落民として誰もがもつ身内意識だったのである。そんな好意を仇でかえしていった。「どんなことがあっても出身地だけは隠しとおさねば」という国鉄の苦い体験がかたくなにそうさせたのだろう。いまになって思うのですが、そのひとだけには打ちあけていたら、地ごくに仏であったろう。

さきほどもいったように、西脇市のＦ上等兵曹、黒田庄のＦ上等水兵、滝野町のＵ上等水兵の同郷人がいた。Ｆ上兵曹は、わたしが部落出身であることは知っていたらしい。いつもと同じように、みんなが集まって、ふるさとのことを語り合っていた。そのとき、Ｆ上等水兵に「お前は○○村のどこだ」と聞かれた。わたしは、とっさに「○○小学校の近くです。」と答えた。「小学校の近くいうても他にもあるし、わからんやないか。」と問い返してきた。その瞬間、息がつまるおもいで、じっとこらえた。言えない。「○○村のどこです。」と出身地を答えることができない。ふるさとが言えない。どれほど辛いことか。必死になって逃げようとするわたしの表情をよみとったＦ上等兵曹はこういった。「小学校の近くだと言っているんだからそれでよいじゃないか。」それ以上彼も聞こうとはしなかった。彼も悪気があって言ったのではなかったかも知れない。しかし、自分にとって出身地を聞かれることほど辛いことはない。

部落のひとたちのほとんどが出身地を他人に話せない。なぜそんなにこわいのだろう。タクシーに乗っても、家の玄関先まで乗りつけられない。バス停をわざとひとつとばして乗り降りするなど、このような肩身のせまい思いをし、生きなければならなかった。

昭和２０年８月、敗戦とともに戦後の奉仕者ということで１年半ばかり外地の陸海軍を内地に送還する任務に従事した。しばらくの軍隊生活だったが、復員してみると、その間に大きな時差が生じていた。その頃、戦中戦後の食糧難と家族数も増えていたので生活は非常に苦しかった。父は石工職人をやめて、窮乏生活と行きづまりを打開するために、トバクの会場にほとんど毎日部屋を提供し、その場銭というやつで生計費の捻出などの手段をさかんにやっていた。父の生きるがための手段としてある程度理解できても、トバクという行為そのものにたいしてどんなに世間せまい思いをしたか知れなかった。土木現場で働いて帰ってきても、足のふみ場もない状態である。ペンチで電灯線を何回か切断して抵抗したこともある。こんな父の行為に憤りを覚えた。しかし、それによって生活を支えることを知った。父には通ずるはずがない。その頃からだんだん父に対する不信感で溝が深まった。

なんぼ貧しくとも、まともな生き方だけはしてほしいと思った。世間からは「バクチうちの子や」といって陰口をいわれたものである。父がこんなことをするから余計差別されるんやと、ずいぶん考え、悩んだ。

部落内ではその頃、青年団の役職にもつき、村青年団の総務部長も引受け、弁論大会に地区代表として参加した。村役場からもこないかと勧誘もあったが、みんなことわった。転々と建設現場を歩きまわった。そして数年後、建設業を自分でやるようになった。小さな仕事を少しづつとれるようになり、経営の方もなんとか順調にいった。しかし、３年ほど経ったころ資金面に行きづまりがきた。銀行との取引も少々あって融資の相談をしたが簡単にことわられた。土地、家敷を担保にと重ねてたのみこんだが結局だめだった。このままではやってゆけないと見切りをつけた。　部落の企業は零細で、資金面で行きづまりがあると、たちまち廃業に追いこまれる。部落企業でも余程の経済力がなければ生き残れない。現実に差別が生きている中では、部落の土地は担保の対象とならない。このような状態が部落企業の立ちおくれをつくりだしたのである。

昭和３０年、知人の仲介で大手企業の建設会社に土木現場主任として働くようになった。本社は大阪であったが、九州の八幡営業所に行くことを自分から希望した。部落を隠すためでもあった。廃業という憂き目をみた自分にとって、今度は裸一貫から出直そうと決心をした。

出身地から遠く離れた九州なら部落出身がばれることはないだろう。努力次第ではひと旗あげることもできるだろう。そんなかすかな夢をもちながら毎日の仕事に生きがいを感じ、仕事に追われ周囲にたいする警戒心も薄れかかっていた。

私は、仕事の関係で上司の家族とともに生活した。奥さんは市役所の戸籍課に勤めていた。そ

れが少し気がかりになる程度で、わたしにとっては安住の地であった。上司にも可愛がられて家族同様の生活であった。そこには差別が入り込む余地がなく、嫁の世話まで話がでるようになった。それもやがて、そこから逃げ出さなければならない日がやってきた。

ある日、いつもとおなじく夕食を済ませて仕事の打ち合わせや雑談をしていた。そこへときどき訪れてくる人がいた。その人は戦時中兵庫県の広畑製鉄所に職工伍長として勤務したことがあり、地理的にもかなりくわしかった。上司ともかなり親しい間柄で、広畑製鉄時代の話をよくしていた。そのなかで広畑製鉄周辺の部落の話もときどきでていた。そんな話がでたときは席を立った。

部落の実情をかなり詳しく知っているだけに、注意して受答えをしていたが、親しそうな口調で、「石井さん、あんたも兵庫県やいうてましたなあ。」「そうです。」返事をかえしたが、そのあと「広畑製鉄の近くに○○地区というとこがあるが、あそこはガラが悪いとこやなア。」「石井さん、あんた知っているやろ。」わたし自身、みずから部落と名乗れない。それが差別とわかっていてもどうすることも出来ない。「そんな話は聞いたことはありますが、くわしいことは知りません。」部落出身のわたし自身が差別者になりさがっていた。自分を守るために、部落であることを見破られまいとして必死である。「石井さんは、そしたらあんたの宗旨はなんですか。」ときかれた。部落は宗旨がちがう。そう思いこんでいたわたしはそれに答えることは部落出身であることを宣言するに等しい。一瞬息のつまるような苦痛をおぼえた。顔が赤くなり、額に油汗がにじみでたのを覚えている。

そのとき、上司や周囲のひとたちは、わたしの表情を敏感に感じとっていた。無意識のうちに部落の話がもち上がったのか、それとも、そのひとたちにとって身元を確かめたかったのか、その必要が生じてきたのだろうか、いずれにせよ長い長い苦痛が続いた。ここでも部落をかくすことはできなかった。部落民はどこまで逃げていっても、差別されるのだと悟ったのはそのころであった。いまにしてわかるが、あれだけ好意的で、当時何一つ迷惑をかけたことはなかったわたしだが、会社にとって、上司にとっても部落の人間は無用であった。周囲のわたしに対する態度はいっぺんに変わった。

「あんたの宗旨はなんですか。」このことばの奥底に重大な意味がある。ひょっとしたら部落の人間ではなかろうかという潜在意識が利害関係を生みだしてゆく。部落の子弟は企業に就職しても長続きしない。すぐ会社をやめてしまう。なまけ者が多い。すべて部落民が悪いんだという。しかし、いたるところで部落差別と向きあい、その重圧によって自ら職場を離れていくのである。

どこへ逃げても部落差別をうけると悟って、郷里へ帰り、食料品の行商から、人のきらうような仕事をやりながら現在の妻と結婚したが、部落であることがわかり、彼女の両親から離婚するようにいってきた。なんとかして２人の結婚の意志を理解してもらおうと両親にあいにいった。

最初に彼女の母が言った。「お前の決断によって親兄妹が世間から冷たい目で見られずに済む。」「男の戸籍簿には赤線が引かれていて、兄や妹の結婚にそれが影響するんだ。」娘を部落の人間と絶対結婚させまいとする母親の口から、なり振りかまわず彼女に懇願するのである。親せきの一人が「部落民の先祖は魔物だということを知らんのか。」何んとひどいことばであった。部落民だってどこがちがうのか、腹わたがにえかえる思いであった。しばらくして母親は言った。「最後に聞くが、親兄妹を捨てるか男と別れるか、どちらかだ。」しばらく考えていた彼女は、「親せき、親兄妹がどんなに反対をしても別れません。」全身を震わせながら最後に言った。こういって、２人は親や親せきの前から離れた。

「部落の先祖は魔物だ」こんな部落に対する偏見が現実に存在しているのだろうかと疑った。娘や息子の結婚という話になると、自分の持っている差別意識を露骨に現すものである。そして、

部落の人たちの悲しみや憤りに気づくこともなく。

私も長い間部落差別から逃げまわり、初めは、「ねた子を起こすな」と反対もした。差別をされる方が悪いのだから、自分たちの方から改めよう、時間が経てば解消するだろうから、そっとしておこうと部落差別から逃げ、全くあきらめの姿勢だった。

ところが、こんどの結婚という人生の最も大事な問題に直面をしたとき、自分自身が目覚め、部落差別に対して強いいきどおりをもちはじめた。「ねた子を起こすな」といっても、寝た子はそのまま死なないかぎり起きてくる。部落に対する差別も表面に表れない場合もあるが、社会的に根づよく差別意識が潜在している以上、それはいつしか表面に現れてくる。

他人に生きざまを語れという前に、まず自分自身の生きざまを語ることが現在の私にとって、もっとも大事なことであることに気づきました。それは部落差別と向かい合い、部落差別の完全解消と人間とは何かという強い自覚をよびさますためです。

私の部落差別の体験は人間が人間として生きる当然の権利を部落に生をうけたという、ただそれだけで人間の基本的人権が侵されてきた。この事実を直視しながら部落問題を社会の問題全般に関連さて考えてゆきたい。部落問題をただあの人の問題だとしてとりあげるのは間違いで、新しい地域社会をつくりあげてゆく上での力とはならないのです。

そういう意味で私の話がお役にたてたらと思っています。

命　名　　平　（たいら）

おじいちゃんは　まだ見ぬおまえに　『平』と名付ける

おまえが生まれる　二か月前　おじいちゃんは　おまえの父さんから
今度生まれる　子どもの名前を　頼まれて
おじいちゃんは　あれやこれやと　考えた

強い子になるように　『剛』
丈夫な子に育つように　『健』
おじいちゃんの一字を取って　『隆』

どれもこれもいい名前だ
でも　おじいちゃんは　おまえの名前を　『平』にしたい

『平』とは　『平等』の『平』

おじいちゃんは　若いときから　部落差別をなくすため　平等社会に憧れた

それと言うのも

希望に燃えて就職し　職場の友から　言葉に尽くせぬ　差別を受けた

今のおじいちゃんなら　はっきりと　その間違いを　説明するが

そのときは　おじいちゃんはふるさとを　隠すことばかりを考えて
逃げて　逃げて　暮らしとった

何回も職場を変わり　九州までも　逃げ延びた
それでも差別は　なくならなんだ

『平』　おまえが大きくなって　就職や結婚をするようになったとき
『平等』な世の中に　なっていてほしい

そんな思いで　おじいちゃんは　まだ見ぬおまえに　『平』と名付ける

このことを　数日たって　おまえの父さんに　話してみると

そしたらどうだ　おまえの父さんも　まだ見ぬおまえに
『平』の名前を　用意していた

折しも今年は　水平社創立七十周年
おまえの父さんは　『水平』の『平』から　『平』の名前を用意した

それを聞いて　おじいちゃんは　うれしかった
本当に　うれしかった

おまえの父さんが　小学校六年生だったとき
部落差別をなくす　学習会に参加して
その帰り道の車の中で　二人で大きな声を張り上げて　心底歌った解放歌
おじいちゃんは　おまえの父さんを　力の限り　抱き締めた

おめでとう　よくぞ生まれてきてくれた
おまえは　おじいちゃんと　おまえの父さん母さんと
部落差別をなくすため　がんばっている多くの友に　祝福されて生まれ出た

おめでとう『平』　ありがとう『平』

おじいちゃんは　心を込めて　おまえの名前を墨で書く

命　名　『平』

※　※　※

全同教大会特別報告という大きな舞台に立たせていただいたことが、すばらしい出会いをさせてくれた。あの日の感動を胸にいっそうの精進を続けていきたいと思う。

以下特別報告の内容である。